

小中連携メリット・デメリット

(「仲良くしようね」「スムーズにバトンタッチしようね」という協力関係)

(メリット)

- ① スムーズな進級
小から中へ移行期における「中一ギャップ」の緩和や不登校の減少につながります。
- ② 学習内容の定着
小学校で定着しきれなかった内容を中学校で補完しやすくなります。
- ③ 異年齢交流
異年齢の児童生徒との交流が増えることで、コミュニケーション能力や思いやりの心が育まれます。
- ④ 教員間の連携
小学校と中学校の教員が連携することで、児童生徒の成長を継続的に把握しやすくなります。
- ⑤ 安心感、
小学校から継続して同じ先生に見てもらえることで、生徒や保護者に安心感を与えることができます。

(デメリット)

- ① リーダーシップ育成の機会減少
小学校高学年でリーダーシップを発揮する機会が減る可能性があります。
- ② 人間関係の固定化
長期にわたる同じ学校での生活により、人間関係が固定化しやすいという指摘もあります。
- ③ 小学校卒業の達成感の欠如
義務教育学校の場合、小学校卒業という節目を意識しにくい
- ④ 中学校の新鮮さの欠如
中学校への進学に対する新鮮さや期待感が薄れる可能性があります。
- ⑤ 教員の負担増
小学校と中学校の連携を強化することで、教員の負担が増加する可能性があります。
- ⑥ 教育課程特例校の場合
特例校として教育課程を実施する場合、教員や児童生徒の負担が増加する可能性があります。

小中一貫校メリット・デメリット

(「9年間でこう育てるぞ」という共通の設計図(カリキュラム)と一体的な運営)

(メリット)

- ① 中一ギャップの解消
小から中へのスムーズな接続を促し中一の不適応を軽減できます。
- ② 学習の系統性
小・中学校の学習内容を連携させ、より効果的な学習が期待できます。
- ③ 異年齢交流
異年齢の児童生徒との交流を通して、社会性や思いやりの心を育むことができます。
- ④ 一貫した指導
小中と同じ先生が指導することで、児童生徒を継続的にサポートできます。
- ⑤ 学習内容の保管
小学校で学習が定着しなかった内容を、中学校で補完することができる。
- ⑥ 独自カリキュラム
一貫校ならではの、独自のカリキュラムを導入できます。
- ⑦ 早期の教科担任制
早期に教科担任制を導入し、専門的な指導を受けることができます。
- ⑧ 長期的なフォロー
長期にわたって児童生徒をフォローし、きめ細やかな指導が可能です。

(デメリット)

- ① 人間関係の固定化
9年間同じ環境で過ごすため、人間関係のトラブルが長期化する可能性があります。
- ② 学校選択肢の制限
小中一貫校の数が限られているため、選択肢が狭まる可能性があります。
- ③ 環境の変化の難しさ
もし学校が合わない場合、環境を変えることが難しい場合があります。
- ④ いじめの深刻化
同じ人間関係が続くことで、いじめが深刻化する可能性があります。
- ⑤ 受験対策
中学受験をする場合、一貫校を選択すると受験対策が難しくなる可能性があります。
- ⑥ 中だるみの可能性
一貫校では中だるみの時期に、学習意欲を維持する維持するのが難しい場合があります。
- ⑦ 学力差
一貫校では、学力差が目立ちやすく、落ちこぼれると取り戻すのが難しい場合があります。
- ⑧ 地域との交流、
地域との交流が減る可能性があります。